



秋風物  
全

特別  
A4  
6741





門  
號 741  
卷



秋風抄序



やほらういぬいひるくしていふふむら  
ふにやまもあつてあつてあつてあつて  
こゝ事なうんなるやういふあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
人あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
にうのらういふあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

むきをなえらうのし祭しるありき  
えんあるむらしてやましむら祭  
寺の上陽れんまあつる美暮り似  
む福を玉り似るるるる海文  
ともしおのむたさにあしと

からんぬらわむまの約使あつる  
我神海なるはの國あつる海  
いづらあつるあつるあつる  
何二位知家といふ祭りあつる

あつるあつるあつるあつる  
思ふあつるあつるあつる  
城秋風といふあつるあつる  
あつるあつるあつるあつる

世春あつるあつるあつるあつる  
祚月あつるあつるあつるあつる  
あつるあつるあつるあつる  
あつるあつるあつるあつる  
あつるあつるあつるあつる

なまのうらみとて花のうらみとて青嵐れはま  
れ高なるうらみとて花のうらみとて牛くら  
てはらうらみとて花のうらみとて牛くら  
てはらうらみとて花のうらみとて牛くら

花のうらみとて花のうらみとて花のうらみ  
花のうらみとて花のうらみとて花のうらみ  
花のうらみとて花のうらみとて花のうらみ  
花のうらみとて花のうらみとて花のうらみ  
花のうらみとて花のうらみとて花のうらみ  
花のうらみとて花のうらみとて花のうらみ  
花のうらみとて花のうらみとて花のうらみ  
花のうらみとて花のうらみとて花のうらみ

祓入の海とて花のうらみとて花のうらみ  
小待とて花のうらみとて花のうらみ  
またまたとて花のうらみとて花のうらみ  
花のうらみとて花のうらみとて花のうらみ  
花のうらみとて花のうらみとて花のうらみ  
花のうらみとて花のうらみとて花のうらみ  
花のうらみとて花のうらみとて花のうらみ  
花のうらみとて花のうらみとて花のうらみ

暁の祓とて花のうらみとて花のうらみ  
曾た名宮とて花のうらみとて花のうらみ  
海とて花のうらみとて花のうらみ  
花のうらみとて花のうらみとて花のうらみ  
花のうらみとて花のうらみとて花のうらみ  
花のうらみとて花のうらみとて花のうらみ  
花のうらみとて花のうらみとて花のうらみ  
花のうらみとて花のうらみとて花のうらみ



正しくはなすべしとていふも一かゝ海は  
名もよきとていふも一かゝ海はなほ  
さきよきとていふも一かゝ海はなほ  
こよあるなるを一かゝ武は元和年  
花は實不味古鏡并早晒之所名高抱  
之黒き人のいふも一かゝ海はなほ  
この名もよきとていふも一かゝ海はなほ  
いふもよきとていふも一かゝ海はなほ  
すれはなほ家隆等のいふも一かゝ海はなほ

人丸のいふも一かゝ海はなほ  
なんあもいふも一かゝ海はなほ  
らもいふも一かゝ海はなほ  
まもいふも一かゝ海はなほ  
いふもいふも一かゝ海はなほ  
わもいふも一かゝ海はなほ  
はもいふも一かゝ海はなほ

新中納言定家卿歌

治承六年袖打の海はなほ







ひとりのりいあゝさるめのたりのきとふ  
絲竹のこゑと打鼓とも俗人もに  
きこつたに甘き後さうら統も畫土  
らぬのちわらうここの歌しまさこく  
れあわくうちるふまそれいま云義  
乃おもむきとわさいま一人一分れと  
つりとあさうのふふもわさひさこ  
うのきあふふまうをてた海なる  
おろりさるるふも乃紫といひめて三百

御首上中下巻とせむと名と秋風此  
抄といふときりり建長二年四月十  
八日小野春雄ひりりりりりりり  
とらりりりりりりりりりりりりり

秋風抄上

春哥

前攝政家百首小山早春と

正之位知家

若山天竺園の中今とあつる雲のまききり

百首の歌の中 入為前攝政

久しあまのたのしみも昔のまききり

早春と 前大納言為家

いふもよまききり 然るも山に雲の降つ

藤原信實朝臣

嘗て若きときも新玉の年と去るに似て

後原為氏朝臣

春寂とや立来りてはよりの君今や

鹿と 藤原公院少納言

之輪心乃春風つらふかきと志し

建保四年院御百之乃書奇

前太政大臣

かこしむる之輪心とて以て君也

題不知 藤原公院大臣

是安の心と君也とては心とて

子又百番并合

皇太后文孝後成女

心とて心とて君也とては心とて

入道攝政家百

正三位家

梅枝と春風とて心とては心とて

依梅の友 藤原公院大臣

梅枝自心とて心とては心とて

柳と

信實朝臣

春のあけしきにけり柳姫は深心のまはる柳と  
建保宮の院清白のまき奇

入道前持政

かきしのおまのまをまもるなりまきあけしにけり

花より

あけ政左大臣

任約山あけしに雲とらうまよる花あけの柳花咲けり

藤原経平朝臣

高砂の尾と柳の影春あけしに花咲けり

尚侍家中納言

咲けりあけしに花の影あけしに春あけの柳花咲けり

藤原院師

山あけの柳咲けりつぎにまよるあけしに春あけの

題不知

持政右大臣

命あけしに春あけの影あけしに花咲けりあけしに

花十そのふ

前右大臣

あけしに春あけの影あけしに花咲けりあけしに

任右社所と首に

社所と首に

うらみ春あけの影あけしに花咲けりあけしに



百首分申小 前按政左大臣

わんざらし宵に寝てをわりの海に我もさるる時  
今ぬち按政家とて題とさるるてふよりさるる  
小養 按申納言賀正事

神よりせめておまじきまゝを我も頼  
洞院按政家百首なり

後之位行能

こまぢらるる程はわの河多つまわればさるるなりと

郭とと 後之位恭亮

海軍按政家とて郭と云はれつゝ河と云ふん

入道前按政

郭と云ふ字にておまじき又月とちさるるを

佛百首に依り郭と

院佛書

我もさるるさるるさるるさるるさるるさるる

題不知 今ぬち京の親王

さるるさるるさるるさるるさるるさるる

九條ありはは

青と我もさるる橋の事の下流に袖をたれり

院は百首なり又月郭と

右大将通忠

橋の白く五月の河をいかに思ふらむじつとあらん

前持政家百首小里盧橋

藤原隆祐

思ひやむじつとあらん五月の河をいかに思ふらむじつとあらん

院山百首より早苗

并四句

小田原の河をいかに思ふらむじつとあらん

前大納言為家の家の十又首よ

入道前持政

五月の河をいかに思ふらむじつとあらん

洞院持政家百首より

前大納言為家

五月の河をいかに思ふらむじつとあらん

入道前持政家百首より

正三位左大臣

今も松葉の真神よころ今もわらふるあつたの松葉

入道前持政

夏の花のうらみは春のうらみよりよ

夏云

藤原院持家



かふらもみれをきつるなまけりてせらるる  
継縁経百首より

前大納言為

そよぎやうらうらわつたあまのこゝろ

藤原公成氏御后

なまをきくこゝろにしりしおしすうかに余り

夕立

源兼氏

くつてもわれおしりつ夕立相致うらうら

建保四年院御百首より五首

前大納言為

風さうらうのしれぬあまのこゝろ

院山百首下 荻風

後三位行能

秋のくろくたのまわりの荻風葉の風の書きかたをうら

題少知

平重村朝臣

心打の風を秋と詠ふ事やうらな萩風をうらむん

子又百首下 公家

赤陽門院越前

如道之冊に父のうらむん方ありまむら秋の風

院山百首下 早秋 少将内侍

秋まぬいそあまの吹風のうらむらにまぬら

洞院抄政家百首に

正三位成實

まろきしつゝかおのり風をうらむら秋

里早秋

入為之系親王

うらむる早秋くならぬ友衣服押入里秋の初

建保四年院山百首下 秋

入道赤抄政

一より川をわたり秋風をうらむら秋の初

日吉社又十首下 早秋

右兵衛尉日吉氏



跡外麻

院田製

秋の八かたのちの麻今更なる書と悉し

百首の申小 入道お振政

春日冊小しき心麻松きき秋海おらぬき

伝台社二十首り

藤登門院少物

かまつてこのちまてつし秋茶少きも麻書

九条内大臣家二十首小々出

伝實朝臣

小宮中久のちのちと麻書小の書いあらん

千又百番千合秋

源具親朝臣

人のいなるき物とちのねれよをみきりし松虫

院田百首小曉出 下野

心よいふちのちを茶わしとるも先秋茶

藤法と 前関白大臣

きりくちのちも茶の茶のし麻書とそらん

お振政大臣

我のちのちのちのちのちのちのちのちのち

入道前振政家秋二十首

正三位知家

露のうすし我のまのりぬ夕暮の葉に秋風ありし

藤原院少将

草の葉は露のうすし我のまのりぬ夕暮の葉に秋風ありし

百舌弁小

衣笠衣内大臣

夕暮の葉に秋風ありし我のまのりぬ

秋夕

院少将

我のまのりぬ夕暮の葉に秋風ありし

権大納言實雄

我のまのりぬ夕暮の葉に秋風ありし

西園寺入道大納言家月十之末

権大納言公相

夕暮の葉に秋風ありし我のまのりぬ

順徳院少将院少将

正三位知家

夕暮の葉に秋風ありし我のまのりぬ

院少将院少将

承明院少将

夕暮の葉に秋風ありし我のまのりぬ

院少将院少将

院少将



鳥羽院及壬午月前庭出

大納言曲の侍

露のつき浅茅のたれ雲の影に影を宿る秋の月  
題不気

くさりの月と雲とがらむと云ふ秋の月  
式乾院御通

さくらんやうん秋の月と云ふ秋の月  
白太右衛門守俊成女

まじりて月と云ふ秋の月と云ふ秋の月  
若大納言為家

ふかしの秋に思ふ秋の月と云ふ秋の月

秋世首小

藤原為氏御后

秋の月と云ふ秋の月と云ふ秋の月  
入道右衛門家方系右所月

信實御后

やがて秋の風の颯々秋の月と云ふ秋の月  
秋深月明と云ふ秋の月

後三位伴忠

おぼろの月と云ふ秋の月と云ふ秋の月  
鴨池院御通情月と云ふ秋の月

前大納言基冬良

神代よりわらわらるる今にわらわらるる

暁麻と

お大納言御車

はまなみの眼をのこるる

院中百そり

伝實御車

秋風よ書こよの書

胡鹿と

蓮生法師

秋新風よきよの友の秋

野外雁

藤石京冬改

乃ちよの秋霧よひ

秋二十そり

藤壁門院少将

冬よの霧よひ

冬よの霧よひ

白太左衛門

うらみの秋

入道前持改家百そり

前持改大臣

吹風よ

建保四年院中百そり



おたけ大臣

草の原下葉をこしつ成るんやうか松尾  
のたけ時入百首うり原麻

入江あけ改

うかつと海舟の原麻麻尾のうりよ本れを  
入江あけ改家百首秋并

正三位知家

初書んをくよれ掉展成此時野うり  
長谷寺十八首うり

入江あけ改

子孫まよふ父のり以初書んをくよれ  
題之知

権中納言賀正

おはつと月日福むぬ宿まよと書んをくよれ  
院書百首うり閑持改

権司院按察

おはつと月日福むぬ宿まよと書んをくよれ  
子又百首并公のうり

白丁たるまを平後成女

深草院書入月書うりつ徳山里に書うり  
順徳院書時并公入月前持改

赤陽の流越前

おろふ人おろふをしし人の場をき秋の月を  
入るお折の家百首より

藤原の家の名

たし月を来れ草は白露と玉にふる有明の月

題めお 後之位の能

月影を寒く流ぬ今より秋をて作る歌

恒春社百首より秋歌

藤原の流師

霞笑ふ神のしるる長月のあつたる時あり

尚侍家中納言

おとし神のしるるを河をふくし秋の葉をみり  
院よりを樹に葉

大納言典侍

しつるあつたるにわらわのり尾と雲の葉を

洞院折の家百首より

前右大臣

きりかきよし秋を人折る叶をけりし心な葉を

秋三千首より 後京為氏御臣

雲つらき心折るる時をよまふ葉を

小野社方合より心所業

藤原為继朝臣

秋山の三つつつがとわんはく事毎小合心所業より  
院山百首より杜紅葉

夜著とあ内大臣

村河よりかろめさるる海竹まきと杜紅葉より  
洞院橋政家百首より

前大臣云為家

小倉山標りふちと秋風白日と心所業より  
吹渡院山河百首方合のうい

前大臣及大臣

秋乃父の福ふたりか村のしとの端より十何る也  
題し十  
村中納言賀季

秋乃父のうむき浪深のまよと心所業  
源有長朝臣

父乃きる心業よりまよと心所業  
後高野入道二品親王及助家五十首より  
道三位朝臣

河乃あふり今よりまよと心所業  
子又百首奇合のうい

赤陽の院越女

夕冬に梢どけし風信に萬葉成の秋は心星

皇太后元文天皇後成女

夕冬の浅茅の末の吹風は雪もまろき秋は雪か

昔秋

式乾の院清更

松の心宿のこもなき廻あつて命もまの秋は心

入道攝政百と和信のりよ

初筆赤陽の院

雪の心宿のこもなき廻あつて命もまの秋は心

冬秋

六帖題弁に初冬

信實御臣

夕冬の浅茅の末の吹風は雪もまろき秋は雪か

子又百書二万言のりよ

赤陽の院越女

夕冬の浅茅の末の吹風は雪もまろき秋は雪か

赤陽の院越女

赤陽の院越女

夕冬の浅茅の末の吹風は雪もまろき秋は雪か

前右政大臣家十又さる

友原為政御后

山風をまじりて神を月むすはれなすりて

お振政家百さる杜初冬

藤原隆祐

うらむ生田社神を月言といひいふは

影

慶政上人

るま是河をさるは神を月何とていふは

日大臣の河言さる田家乃時雨

入道前振政

是也也田の店の逢いあはれとていふは

時雨

前振政大臣

神を月さるはあまの村をさるは

持中御之賀季

はるをさるの屋とていふは

六帖巻子

正三帖知家

うらむ我身むすはれは月神さるは

大納言為家の家乃百さる

信実御后

はるをさるはあまの村をさるは

暮山時雨

明珍法師

夕立の河風さすて夜半はあけぬと云ふ時雨なる

因長落葉

隆吉法師

あつらふ事なくと云ふ時雨さすてあけぬと云ふ

建保四年院中白き小冬云

前大政大臣

木立繁さふくちり紅山吹散るおとせぬと云ふ

橋上落葉

院清兼光

山へんあそびの海へん事繁くまはれぬと云ふ

題一す

攝政大臣大政大臣

祇園月夕は元とあはれしは河をぬ宿し神おれり

夕何處

入道三京親王

ふりかへしと云ふは寒さの冬相のさかたは河をぬ

冬何

前大納言為家

おとせぬ時田は雪根ふくは鴨の何れか身と云ふ

後三位行能

竹のたのむく雲あはれしは雪根ふくは鴨の何れか

九条右大臣

知の玉のあはれしは雪根ふくは鴨の何れか

院清兼光

院清兼光

書風

船とに氷を今もいひらる霧をまよつた

氷と 入道お持政

いふれぬるまゝく風景をいひし殿は燈や砂をた

九条お内大臣

葉と海を海くふと砂をたふすよめは風を

池の鳥 右衛門お通成

久しよまの氷の氷をたふすよめは成あらしむる

院の百首より池の

友原お継お辰

わがよまたをわらふれはたのしき少少もいづれを

湖邊氷と 平重時報辰

まの浦や河を氷の波をたふすよめは風

おのり 中魚師光

何とせしるるいひにせよ少おまて書さよめは

お持政家百首より池の

藤原伊弉辰辰

港入の若かりしをいひては夜をたふすよめは

千鳥と 藤原お辰辰

いよりの心を成りておまお流りあを成り

千又百首よりお辰辰

赤陽の流越也

向き流るる谷のきりうりりきていまの宿の妻もた

困居妻

植大納言良妻

植大納言の妻ははらのこいこいとこいこいとこいこいと

久しゆうし

院法華

とし女玉はとらうひくきよなるの何歎き

前持政た大信

新うけわさぬきこいこいとこいこいとこいこいと

結海流百さふ

前大納言の家

ふさしゆうりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

信實御后

はなとく<sup>な</sup>はなとくはなとくはなとくはなとくはなとく

君文

おのり信

うみうみうみうみうみうみうみうみうみうみうみ

舟内信

うみうみうみうみうみうみうみうみうみうみうみ

尚侍家中納言

うみうみうみうみうみうみうみうみうみうみうみ

九条おのり大信家十五さふ名新言

承明門院少宰相



常少秋事播如蒙とかなるはうちあはれいふ人あはれ  
子又百番文の公奇

赤陽門院越前

常事しんかしくすけの國をわらひし立行  
寛喜廿五入内屏風奇

あふ政大臣

烟の橋入る言かす焼たてとていふけりともあはれ人  
入るあ橋政百言ともわたりくらふ

初筆子内大臣

ふふふふふふふふふふふふふふふふ我身わら

題不知

権大納言實雄

今やふふふふふふふふふふふふふふふふ

卜部急直宿禰

夫ぬとささぬ別のちんれいふをきき年あき  
院由百言ふ歳言

藤原行家御臣

ふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふ



入道前持政家百三十一

藤原家御臣

藤原家御臣 藤原家御臣

宗茂

小治直宿祿

秋風

忠忠

如兼守保

孝子

忠行

藤原為継御臣

六帖

忠行

前大納言為家

九条前内大臣家

九条前内大臣家

藤原為家

任官社百三十一

任官社百三十一

藤原為家

入道前持政

忠行

入道前持政

忠行

忠行



わらわの命ふくむ意儀秋の暮らく地より

前関白の大臣

我がとくものさへはも秋風なきまの秋の

約意

尚侍家中納言

そのうへ今春さふぬぬん交わら地より

この地越え

あち納言為家

この湯のあたる月とてしよとらたし君と約

正三位知家

春のうへ秋寒けり秋風小園の夜をさす

宗道意

寂智法師

今春よまのぬこつまは秋風小園の夜を

夜意

春原時朝

あまのりりらるる夜とてとまのぬの夜交に

院由百さうりう意

下野

かゝるのさやのむら育むまこつぬ人か

恵意申ふ

并田信

たゝひさうの御さぬやに何とるん今意

宣仁門院一条

仍とらぬまじりぬの今さうりう言れ

実風恋

院中恋

いしわらじは海風うねるにまよふ心なる恋

六帖恋

正位知家

袖うすき帯もはなれはるるよわらぬ海子ぬれはるる

題石知

当侍家仲納言

おきてゆく心はゆく名風をたれわすくはれはるる

入道お侍政

ふくまじゆき身と頼れを令りたれはるるよ

前太政大臣

歎倦しゆく心はゆく名風をたれわすくはれはるる

前太政大臣家十又その

右兵衛督十又その

せきういあやふあまのまはるる心なる恋

実風恋

友原経光

今こころはこころおぼれはるる心なる恋

正位知家乃家とて別恋

信実御后

よめつゝあやふあまのまはるる心なる恋

恋

少将侍

あまのまはるる心なる恋

尚好家中納云

世にたのむ地をうけとて友とて別ありて  
洞院折政家百そのふ不遇云

藤壁門院但云

世にたのむ地をうけとて友とて別ありて  
題云云  
友原隆社

海にまじりて神のまじりてありとて云云  
実油意  
源兼氏

鳥居に池ありて云云とて通云云  
実河意  
友原孝宗社

世にたのむ地をうけとて友とて別ありて

継家百そのふ 為氏社

わが家ありて神のまじりてありとて云云  
六帖題云云  
友大納言為家

牛のしる余とて神のまじりてありとて云云  
恒云社百そのふ  
尊司院持家

ふとて神のまじりてありとて云云  
子又番新公のう

向太后宮中修成女

夏初うきくやんね成りん元禄風流にわろ袖を

恋状

恋道す内大臣

己を打ちくふふんぬあふんぬあふんぬあふんぬあ

取明門院小宰相

身あふんぬあふんぬあふんぬあふんぬあふんぬあ

警司院按察

忠よふらたなむはあふんぬあふんぬあふんぬあ

式乾門院内運

うらふんぬあふんぬあふんぬあふんぬあふんぬあ

康壁門院少将

叶ふらうたあふんぬあふんぬあふんぬあふんぬあ

少将内侍

じんまのあふんぬあふんぬあふんぬあふんぬあ

院内百部小宰相

并内侍

袖あふんぬあふんぬあふんぬあふんぬあふんぬあ

月あふんぬあ

紀宗氏

わんぬあふんぬあふんぬあふんぬあふんぬあ

あふんぬあ

友原為親

わんぬあふんぬあふんぬあふんぬあふんぬあ



院由百そりりう方枕念

承明院少宰相

意くふんかき後たがふ枕さきしめをうし

送ふ心

あま納言冬良

いふせんまらじ程の後とたうりうの歴りり

修司院梅宗

後とも思ひ成る契りしとたき人のあらと

院由百宗

承明院宰相

かたしう我才ふそらぬもろの成ゆりいしと

夕念

藤原院少相

ういふとひつるにきしむははの身しむる

子又百番う名歎 源具親親臣

今定てふひいふ人き核乃たきさぬやまらひひん

秋念

友原為教親臣

今しとひいふしうひひりあつる秋れたれ

あま政大臣家十又そらふ念

権大納言冬冬

あらず備ふわりし名跡とまきし同つこと歎く

権大納言実雄

おしはるしをたき命然いさうはれふのこ

院内百首の巻の風立

白河宮を奉隆親

そよよとこのつらき世を海にけり葉生風ふりきて  
言ふ事なき

共部親有友

月影花をわらうや思ふ人ぬまのふらうつ人の心と

空の虫と心

指大納言守実確

才とくく何のこころは静かなるあはれ人の心と

六帖題三首

あま納言為家

ふいふとたのむに浦の川はあはれとくはなれり

九条あゆむ屋敷三十三とふ死心と

源具親御后

よそふに懐かき里はるるこころはあはれ

あはれ家百とくはり心と

伝実御后

まじりて葉のまじりて心はあはれ

遇不逢心

源孝行

ふいふとたのむに浦の川はあはれとくはなれり

院内百首の巻の風立

藤原の院内

ふいふとたのむに浦の川はあはれとくはなれり

題のやう

在方物通忠母

かみそりしつらに蔵しつらにわらひのまをばりしつら

入居方持政

つらぬぬの風雲なつてさうてはわぬ袖のあられ

院は昔首よりつらぬ

舊目院持宗

いふやうの煙草年おれとさう程よるゝといふ

意のや

方持政家臣の

かまひつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ

産屋の院少将

いふやうの煙草年おれとさう程よるゝといふ

在方物氏親臣

うまにいふやうの煙草年おれとさう程よるゝといふ

院より持政の

昔のつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ

住持社井つらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ

昔のつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ

題のやう

いふやうの煙草年おれとさう程よるゝといふ

在方物氏親臣

わが月娘もよむしよ成るこころよふ人なれり

夜宮ありはちむ

なほあまのしりしとてわらうはぬあまふ人とまれ  
そのくし

雑哥

建保四年院中百之秋

入夜あけあけ

我が國の和のつゆの神めはれれりやその秋

帝王系号とのしきてこころつをて

中原師光

神代より今我君よつこころわすれつこころ

あちの言を家の百そり

祝部成茂

君もめらんはるやとせむらるれよひあえ

題しす

法之位存忠

かすりる春のあけのひをかへし月約そつてまいたか

二重院禊波女

春のあけのひをかへし月約そつてまいたか

院御弁公のうし

源後平

とくたうのなをよきとてそをよきとてまいたか

花と

平長時

とくたうのなをよきとてそをよきとてまいたか

あ伊勢云

蓮生法師

限りて海をよきとてそをよきとてまいたか

國后むす

あ大納言冬良

しひとになきてそをよきとてそをよきとてまいたか

前大納言冬良

権大納言實雄

いさりて秋の海をよきとてそをよきとてまいたか

入左衛門尉政家

従一位倫子家尾法

いさりて秋の海をよきとてそをよきとてまいたか

月守

初室前内大臣

月とては清くもろく年とてはまじくもつらみ

前大納言伊平

身ふりり若くも秋のまじくは秋のまじく

三位忠宣

歩秋の雲井のまじくは秋のまじく

正二位知家

月とては秋のまじくは秋のまじく

信實朝臣

心すし秋のまじくは秋のまじく

法眼長壽

大なる秋のまじくは秋のまじく

前大納言頼朝家十郎

三善康朝

冠波のまじくは秋のまじく

右大臣冬經

身ふりり秋のまじくは秋のまじく

源有長朝臣

陵園安

菊の露のまじくは秋のまじく

善淳法師

題安

年ふも秋のまじくは秋のまじく

光後朝臣世とのれは信守をまらばは

して信守を

小槻為宗

ふらふとらるる唐の信よ実たの神にぬさる

題ふ名

下野

さらんをいじらぬの又指ふさすは誰約合

前橋政家氏名

山のとよきよとれは好ましく冬棠は煙きり

入道之宗親王

中橋のわらわは海から来たかといふは

院御百さうり茶巻

権大納言忠信

あつと信君あつと一柱われまはさるるあつと一年か

お中納言定嗣

つよとてらりつわはたきまた私とて一年を善わ

題ふ名

慶政上人

まみりつらうきおれたの言はれすしひまゆつわ

若原隆祐

なつらまき久くはまきとまねるむき事れつら

徳大寺よりありわがて信守の秋のしあき

つたなる人の名は

心大屋

に軍之風をきくはひるもあまのしんがけのうら

洞院の政家百そりうの家

此正位成實

此の所はもとむらうのくさふのしんがけのうら

位を社百そりう

尚侍家中能玄

とくをのきくはひるもあまのしんがけのうら

佛百そりう様

つたなる人の名は

院御制





いづれに成るやうな事と云ふはしるべきに非ざるや

九条赤田大臣

我う今浪の三浦地方を以ていふ事んとて瑞と為る

後三位伊忠

いづれに思ふ事と云ふはしるべきに非ざるや

右原忠義卿臣

いづれに思ふ事と云ふはしるべきに非ざるや

檢大僧正實任

いづれに思ふ事と云ふはしるべきに非ざるや

同地法師

穴蟬の世と云ふはしるべきに非ざるや

右原光成卿臣

いづれに思ふ事と云ふはしるべきに非ざるや



右以或本書寫卒不審繁多也

一校卒

千二子九子

